

『出家とその弟子』 混淆する宗教世界 — 『精神界』・一燈園からの考察 —

大島 丈志

一 はじめに

倉田百三の戯曲『出家とその弟子』は、大正五年十一月、倉田百三が二六歳の時、高橋元吉らと起こした同人誌『生命の川』十一月号に第四幕第一场までが掲載され、さらに同年十一月療養先で第六幕第四場の幕までが書き上げられた。翌大正六年六月岩波書店より単行本化（初版八〇〇部五〇〇円自費出版）されるやベストセラーとなり、倉田は一躍有名になった。ただし、その後倉田の作品は、どれも高い評価を受けることが出来ず、『出家とその弟子』は倉田の出世作であると同時に唯一の代表作であるということが出来る。

『出家とその弟子』は、親鸞やその不肖の息子善鸞、弟子唯円といった浄土真宗の開祖親鸞にまつわる実在の人物が登場する。ここから仏教、その中でも浄土真宗の世界を題材とした作品であることが分かる。にもかかわらず、この作品にはキリスト教の影響があるという指摘がある。亀井勝一郎は文庫版解説において「キリスト教的感情によって親鸞を描いたとも云える^①」としている。しかし、なぜ、実名を挙げて親鸞を描き、かつ親鸞とその弟子たちの様相を描いているのにもかかわらず、そこにキリスト教的感情が出てきてしまったのであろうか。この『出家とその弟子』の宗教性について、作家倉田百三、仏教における近代信仰を打

ち立て宗教界に多大な影響を与えた清沢満之を中心とする『精神界』、独特のコミュニケーションを形成し倉田も入園した一燈園より考察していきたい。なお、『出家とその弟子』本文の引用は、『日本現代文学全集46 生田長江・阿部次郎・倉田百三集』（講談社 一九六七年九月）より行う。

二 先行研究について

『出家とその弟子』における宗教観を考察するにあたり、この作品が従来どのように捉えられてきたのか、その主なものを押えておこう。

紅野敏郎は『出家とその弟子』における師と弟子の関係について言及し、次のように述べている。

親鸞と不肖の子善鸞、愛弟唯円を配し、恋愛と性欲の相剋を追及し、終末は、親鸞の臨終の場で、すべてを許す他力信仰の世界を出現させる。愛欲と離教にアナーキーに生きる善鸞と、恋と信仰とを同時に得ようと悩む唯円とは、倉田の二つのすがたであつたといつてもよい。人間の罪深い悩みと同時に純粹への願いがそこには脈うつていて、まぎれもなく倉田がそこに息づいていた。この師と弟子という関係を中核として構成された作品は、大正中期にじつに多い^②

紅野は唯円とは悩みの中にある作家倉田本人であるとした上で、師と弟子という構成が大正中期に多いことを挙げている。事実、倉田も、詳しくは後述するが『出家とその弟子』執筆時期、一人の師を見つけており、そのことが作品の構成に大きな影響を与えていると考えられる。『出家とその弟子』の宗教性を考察するにあたって、倉田をめぐる師弟関係がどのようなようになっていたか考察する必要があるだろう。

田中実『出家とその弟子』がベストセラーであったにも関わらず研究が少ないとする。そして、作品中で父親鸞の他力信仰に対抗して自力修行へ向かうはずの善鸞が「不調和な人生」を呪い「放蕩者」になって行く事を挙げ、善鸞にはある種の自己肯定があるとする。そしてそれは唯円や親鸞にも通じ、結果として対立の世界を生じず、結局大団円を結んでしまう所に弱点を見る。そして親鸞臨終の場面には「念仏思想のなかにある〈他力〉⁽³⁾という悪人正機のパラドックスとは別の平和な調和した世界観がある」と非難している。

たしかに田中が言うように親鸞と善鸞は宗教的対立を行っておらず、この作品の中でも最も矛盾する部分である。そして最後の臨終の場面であるが、そこでは他力本願とは別の平和・調和の世界が描かれている。では、なぜそのような世界観・宗教観が描かれたのだろうか、それを単に作家倉田百三の弱点としてよいのだろうか。この点を探り、田中の論考を深めていこう。

三 『精神界』と『出家とその弟子』

では、『出家とその弟子』において親鸞とその周辺の人々が、どのように描かれているのか、作品の宗教性という点にこだわりつつ検討して

『出家とその弟子』混淆する宗教世界（大島）

いこう。

まず注目されるのは第一幕第一場である。第一幕第一場では慈円、良寛が親鸞の弟子として登場する。彼等は雪の積るある田舎の家に訪れる。これがきっかけで後に唯円と親鸞との関係を作ることになるのだが、今はここに描かれる人物に着目したい。ここで描かれる人物であるが、これは実際の人物の生存期間と大きくずれている。念のためそれぞれの生存期間（比較するため西暦とする）を挙げると、親鸞は浄土真宗の開祖で一一七三年～一二六二年まで、慈円は親鸞の剃髪を行ったとされる天台座主であり『愚管抄』の作者一一五五年～一二二五年まで、良寛は禅僧であり歌人で一七五七年～一八三一年まで、ということになる。これらの人物が、実際の生存期間とは異なる形で登場している理由は大きく二つ考えられる。

一つの理由は、第一幕第一場が『出家とその弟子』を伝記ではなくあくまでもフィクションであるということの表明を行っているのではないかと、ということである。『出家とその弟子』は親鸞とその周辺の人々に題材をとっているため、どうしても読者は親鸞そのものと重ねて読んでしまう。しかし、『出家とその弟子』においてはまず冒頭で、これがフィクションであり、実際の親鸞を描こうとするものではないことを宣言していると考えられるのである。

もう一つの理由は、親鸞の弟子として天台宗の慈円や禅宗の良寛を置くことで、この作品の中心的役割を果たす親鸞が、よりすぐれた人物であるということを表明する構想となっている、ということが出来る。

次に注目すべきは第五幕第二場、親鸞と唯円の対話の中で親鸞が語る言葉である。親鸞は唯円から宗教と愛との相克の悩みを受けて、次のように述べている。

親鸞

私はお前のために祈る。お前の恋のまどかなれかしと。これ以上のことは人間の領分を越えるのだ。お前もただ祈れ。

（後略）

唯円

（飛び上る）私は祈ります。私は一心こめて祈ります。祈りで運命を呼びさします。（後略）

親鸞

其処に恋の間違ひがあるのだ。愛の働きには無限性がある。愛は百人を愛すれば百分されるやうな量的なものではない。甲を愛してゐるから、乙を愛されないといふのは真の愛ではない。法蔵比丘の水の中、火の中での幾万劫の御苦勞はあまねく、衆生の一人、一人への愛のためだったのだ。聖なる恋は他人を愛することによつて深くなるやうなものでなくてはならない。

親鸞は非常に人間的な対応をする者として描かれる。また「祈り」や「愛」という発言が多くみられる。この場面だけに限らず『出家とその弟子』には多くの「祈り」や「愛」が描かれ、「祈り」「愛」することが作品内部の親鸞の根本思想となっている。だが、この「祈り」や「愛」については、『出家とその弟子』の出版当初より浄土真宗側から批判があった。

「祈り」であるが、浄土真宗では「祈る」のは心が不純であると考えてこの語を嫌い「念ずる」という語を用いる。浄土真宗においては阿弥陀仏に念ずるのであって祈るのではないのである。「祈り」はキリスト教において頻繁に使用される語である。

次に「愛」であるが、そもそも仏教においては、「愛」は迷い、生の

衝動・執着の根源「渴愛」として否定的に見られる。そして執着を離れた普遍的な愛として「慈悲」が説かれる。「愛」とは、まさに近代になって西欧から持ち込まれた西洋的概念であり、『出家とその弟子』では仏教の慈悲があえて「愛」に変えられているということが出来よう。

この第五幕第二場の場面からは、『出家とその弟子』には、浄土真宗・キリスト教の混淆が起こっているということが出来る。前述の亀井が「キリスト教的感情によって親鸞を描いた」と発言したのも、これらのような言説から裏付けることが出来る。にもかかわらず、『出家とその弟子』が仏教文学としても受け入れられたのはなぜか。それは『出家とその弟子』出版以前、清沢満之、暁鳥敏らによる浄土真宗改革運動の象徴である『精神界』において、既に西洋の語が親鸞を説明するものとして使用されていたからと考えられる。

『精神界』は清沢満之を中心として暁鳥敏が編集者となり発行された、浄土真宗系の仏教近代化を目指す雑誌である。明治三十四年から明治三十六年まで続き、親鸞を再評価し、周囲に親鸞の再評価を促した。また明治三十六年には『歎異抄』に関する特集が組まれ、『歎異抄』を広めることにもなった。

話を戻して『精神界』における西洋語の問題であるが、例えば清沢満之「実力あるものゝ態度」（明治三十四年）では「実力あるものは強敵を愛すと云ふ事が詮はれて居る。（中略）耶蘇が、山上の垂訓に、「汝の敵を愛せよ」と云ふたのは面白い言葉である」とし、関連して阿弥陀仏は絶対的に強いいため、悪人も愛すのだと主張している。ここでは、親鸞の言葉を記したとされる『歎異抄』の「善人なをもちて往生をとぐ、いはんや悪人をや」という悪人正機の発想がキリスト教の愛を用いて説明されていることが分かる。

以上のように『出家とその弟子』には、キリスト教言説を用いて仏教を語る『精神界』の表現と近似した表現の使用がある。清沢満之ら『精神界』による仏教の近代化にはこのようなキリスト教言説の使用も含まれていた。『出家とその弟子』は『精神界』において仏教の近代化が叫ばれた後であったため、そのキリスト教言説も読者に受け入れられたと考えられる。

しかし、『精神界』の主張した新しい浄土真宗と『出家とその弟子』との決定的な違いもある。『精神界』と『出家とその弟子』の大きな違いは、浄土真宗の『精神界』が他力本願という主張で貫かれているのに対して、『出家とその弟子』は完全に他力本願ということではない点である。具体的にはどのように違うのか、親鸞の息子善鸞に関する場面でその差異を明らかにしてみよう。

まず『精神界』の他力本願の視点で、つまり実際の浄土真宗の世界観で親子関係を見る。実際には善鸞は浄土真宗の根本とも言える第十八願の他力本願を否定している。そのため善鸞は親鸞の死の六年前に義絶されている。

『出家とその弟子』では僧一は「当流の法統を継ぐべき身であり乍ら、父上にお背き遊ばすとは浅ましい事で御座います」「善鸞様は放蕩にて素行の修まらぬ上に、浄土門の信心に御反対で御座います。」(第二幕)と述べている。善鸞が他力本願に反対であると描かれており実際と同じ親子関係として親鸞と善鸞は設定されている。

本来であれば、両者の対立が追求されるべきであるが『出家とその弟子』では親子の対立について深く追求されていない。また善鸞が「何といふ変な世界でせう。不調和な人生でせう。」(第三幕第一場)と語り他力本願に正面から反対せず、自らの不調和を嘆く存在として描かれている。

る点も実際の親子関係とは異なる。

この善鸞に対して親鸞は、「私が悪い、善鸞はことによくない。ほんとに人を傷けるやうにできてゐる不仕合せな生れつきだ」(第五幕第二場)として、「不仕合せ」や「生れつき」として善鸞の問題が処理されている。ここでも他力本願に関する対立は取り上げられないのである。

さらに作品終結部においては、親鸞の臨終の場面で親鸞と善鸞は和解までしてしまふのである。『出家とその弟子』では親鸞と善鸞の他力本願をめぐる対立を非常に柔らかに描いているのである。

このように見るとキリスト教の言説によって仏教を説明したりはするものの、この他力本願については強い主張を誇示している『精神界』と『出家とその弟子』では大きな違いが見られる。

編集者でもある暁鳥敏は『精神界』第三卷(明治三十六年)において一〇回にわたって『歎異抄』を読む」という記事を掲載している。暁鳥は次のように述べている。

然れば私共は、私共の精神がいかにやうであろうか、行為がいかにやうであろうか、そんな事に心配せず、たゞ如来の御慈悲に疑晴れて、身も心も如来の御計らひにうちまされるより外に安心の道はないのである。⁽⁶⁾

暁鳥敏の『歎異抄』に関する主張は、この世のものはすべてあてにならない、ただ絶対に如来の慈悲に頼るのみである、外の事は考えなくてよい、念仏をせよというものである。ところが同じく親鸞を描いた『出家とその弟子』の善鸞の場面では他力本願の是非には触れられず、代わりに調和・不調和という発想が入ってきてしまふのである。親鸞は

臨終においても「善い、調和した世界ぢや」（第六幕第四場）と述べている。

『精神界』は仏教の近代化運動を行い、それに伴ってキリスト教の言説で仏教の発想を語っていた。『出家とその弟子』において「祈り」や「愛」といったキリスト教的言説が繰り返されるのも、『精神界』が開いた仏教の近代化の一端であったと言うことができよう。しかし、『出家とその弟子』では『精神界』において強く主張された他力本願という『歎異抄』の精神の中に調和・不調和という発想が混じってきており、この点が独創的であるといえる。

ではこの調和・不調和とは一体なんなのだろうか。

四 一燈園と倉田百三

大正時代の文学研究をする際、一つの現象にあたる。それは、大正期宗教ブームの中で若者が新宗教へと走り、その過度な信仰への傾倒と創作が密接に結びついているということである。

倉田百三もまた財団法人であるがコミューン的な新宗教に近い形態である一燈園¹に入っており、『出家とその弟子』執筆は倉田の一燈園生活の時期とほとんど重なっているのである。従来、倉田が『出家とその弟子』を書いた頃に一燈園に通っていたこと、親鸞のモデルが西田天香で、倉田が唯円と想像されることは言及されるものの、では一燈園の主張と『出家とその弟子』への影響についてはあまり触れられてこなかった。ここで、一燈園が『出家とその弟子』の宗教性にどのように関わっているのか検討してみたい。

一燈園は、明治三十七年、西田天香により創始された。自然にかなった

生活をしさえすれば、人は何物をも所有しないでも、また働きを金に換えないでも、許されて生かされるという信条のもと、つねに懺悔の心を持って無所有奉仕の生活を行う団体である。

一燈園では、特定の本尊を持たないが、唯一、「（光（おひかり））」という「佛」「神」「天」などを通じた象徴を持っている²。托鉢・行願（便所掃除などの仕事）をすれば、衣食住は「（光）」に保証される。よって世俗の生存競争やお金と無縁の生活が出来る。托鉢・行願の他にも、畑仕事・車引き・洗濯も行う。

一燈園では同人（どうにん）が一つの家族として共同生活を行い、子女の教育も一燈園の経営する園内で行う。宗教法人として必要な本尊・教祖・信者はもっていない。倉田の入園した時期は同人が二十九人³で、資金・施設共に少なく、路頭における托鉢・行願が主な活動であった。

一燈園の開祖西田天香（明治五年〜昭和四三年）は滋賀県長浜の商家に生まれる。三日三晩の断食籠坐の果て、赤ん坊の泣き声を耳にして大霊覚する。それは母と子供の間には争わずとも恵まれる食があるということであった。ここに生命の原点を見出し、托鉢行願を路頭にて行った。そして大正二年九月京都鹿ヶ谷に一燈園をつくったのである。

倉田が入園した時には同人の数も少なかったが、『出家とその弟子』がベストセラーとなったこと、さらに大正一〇年、主に西田の講演記録を集めた『懺悔の生活』が出版されたことにより、西田天香と一燈園の名は広まり、多くの同人が一燈園を訪れるようになった。

では倉田百三と一燈園との関係についてもう少し詳しく見ていこう。

倉田百三は大正二年二三歳のとき失恋（妹の友人・結婚）し、さらに結核発病、一高退学と不安な時期が続く中、大正三年二四歳時には聖書研究会へ参加。同時に叔母に『歎異抄』を借り、親鸞に傾倒するように

なる。この時点から、倉田にとって信仰は雑多なものであったと言うことがうかがえる。大正四年、二五歳の時はしきりに教会へいっていたが得るものがなかったという。『出家とその弟子』執筆開始（大正五年七月頃から）の約七ヶ月前、大正四年二月四日、以前より問い合わせていた西田天香の一燈園に入り、宗教的な労働奉仕生活（托鉢行願）を行う。しかし病気もあって一燈園には長くいられず翌大正五年一月末には一燈園の近くに下宿を借り、下宿先から一燈園へ通う。この時期は西田の子に英語教育などをしていた。同年六月二日、庄原の姉の病気により、一燈園から離れ帰郷する（西田天香との関係は続く。大正九年六月一〇日まで書簡のやりとりがある）。同年九月には『白樺』の衛星誌「生命の川」を創刊。西田天香からは二人の姉の法事を行ったこと、一家を一燈園的道場にとの要請がある。同人誌『生命の川』十一月号に「出家とその弟子」を発表。第四幕第一場まで。一二月には転地先で六幕まで完成させた。つまり『出家とその弟子』は倉田が悩みの末に一燈園へ出かけ、そして離れた直後に描かれた物語だと言うことができる。

では倉田百三はどんな気持ちで入園したのであろうか。

西田さんの話を聞いてまことに畏れ入りました。私はこれまでも私の生活やまた文壇の今の人々の生活などの虚偽と空虚とを衝かれました。そして恥づかしくまたuneasyになりました。

私は西田さんは実に偉いと感服しました。この後は一燈園に止まり、天香師を善知識として修業したいと考へます。

久保正夫宛 大正四年二月四日

倉田の入園は西田崇拜の傾向がある。近い時期に日蓮宗系の在家仏教

『出家とその弟子』混淆する宗教世界（大島）

団体国柱会に入会した宮沢賢治が田中智学を崇拜したように、新宗教には強力なカリスマを持った人物が出現する。右の書簡から分かるように、倉田は自らの師として西田を選んでゐる。浄土真宗では善知識とは念仏の教えを勧める人であり、特に信徒が正しい法の継承者として法主（仏の教えを説く人）をよぶ言葉である。倉田は仏教の師に近い存在として西田を捉えていたということである。

しかし、実際に倉田の体は、以前から肺結核にかかっており、一燈園における集団生活や托鉢・行願に堪える事は出来なかった。また、精神的にも辛抱することが出来なかった。

これら（芸術・健康―論者注）のものを失はない生活と聞かされ乍ら、明日からその生活に入ったものとして考へて見ると、とても今の私には辛棒出来ない気がするのです。

西田天香宛書簡 大正六年一月一八日

以上の様に、倉田の一燈園での生活はわずか半年ばかりであった。そして一燈園から距離を置くと同時期に『出家とその弟子』がヒットし、倉田は作家として、宗教家として認められていくようになる。そうすると、西田と倉田の立場は逆転し、今度は西田が倉田に頼ると言う場面も生まれる。

確かに心にあることをそのままの姿で表現することは至難のことです。あなたの此度の御計企の事業はどのやうなものか知りませんが、私は心を緊張させて期待してゐます。（中略）武者小路氏に直にその旨を通知いたしました但折返して別封のやうな返事が来ました。

何でも東京に氏の傍にあなたを悪く云ふ人があるらしくて感じを傷付けてゐるらしいのです⁽¹²⁾ 西田天香宛書簡 大正六年二月七日

この西田の相談がどのような用件であつたのかは不明だが、大正一〇年に発行する『懺悔の生活』の構想が既にこの頃から在り、文壇で一躍寵児となつた倉田のつてを頼ろうとしたとも考えられる。

以後、倉田は西田と距離を置き作家としての生活に入っていくわけだが、西田を善知識として捉えていた姿勢には変化がなかったものと考えられる。倉田は大正九年の書簡で次のように述べている。

近いところに居ながら御眼にかかれな残念に思ひます。念仏する時にはいつも貴方を思ひ出します⁽¹³⁾

西田天香宛書簡 大正九年六月一〇日

しばらく会っていない相手への手紙のため誇張がある可能性はあるが、大正九年の時点でも倉田にとって西田は自らを導く師であり、念仏と関係の深いものとして捉えられていた。以上からするならば、『出家とその弟子』でいえば西田が親鸞であり、倉田が親鸞を熱狂的に慕う唯円のモデルであるとする考えは妥当性を持つと言える。親鸞と唯円、西田天香と倉田百三の関係であるが、中村清三はこの点について次のように述べている。

もちろん『出家とその弟子』の親鸞は、現実の親鸞とは似ても似つかぬ親鸞ではあるが、百三がこれまでの思想遍歴、求道遍歴の総決算を、この書に賭けて書き、その表現形態として、自分が非常な影

響を受けた西田天香を、この作の親鸞に模し、自分を唯円に模して描いたとみることも、或る程度出来るであらう⁽¹⁴⁾。

前述したように師弟関係という点では親鸞と唯円は西田天香と倉田の関係に近いかもしれない。ただし、倉田自身は、西田天香は親鸞とはことなることを西田宛の書簡の中で述べてもいる。

私は親鸞をあなたとは全く違った性格に描きました。非常に否定的な天才に書きました。何に対してもはっきりきめられない人にしました⁽¹⁵⁾。南無阿弥陀仏の外には、具体的な定見の立たない人にしました。

西田天香宛書簡 大正六年一月一八日

この時期は前述したように倉田が一燈園に下宿から通っている時期である。『出家とその弟子』における親鸞は、倉田の言うように否定的、悩める存在であり、自らの罪を糾弾する点では親鸞像と近似するが、他力本願に対する感覚が大きくことなっていることは『精神界』との関係の中で述べた。『出家とその弟子』における親鸞は、悩める唯円の支援者であり、自らの不調和を嘆く善鸞の最終的な理解者である。そのことからするならば、『出家とその弟子』における親鸞は頼りになる、偉大なる父として書かれているといえよう。西田本人とイコールで結ぶことは出来ないといえ、このような親鸞像の背景には、やはり倉田が善知識として捉えた西田の姿があると考えることが出来るだろう。

五 『出家とその弟子』に見られる一燈園の思想

では、実際に一燈園はどのような思想を持ち、それが『出家とその弟子』の宗教性とどう関わるのであろうか。『出家とその弟子』の一部分を形作っていると考えられるものに、一燈園独特の宗教観が挙げられよう。

結論から言うならば『出家とその弟子』における浄土真宗とキリスト教との混淆の一つの要素として一燈園の信仰のあり方があると考えられるのである。一燈園のシンボルは、現在も仏教の卍とキリスト教の十字を重ね合わせたものである。一燈園の宗教に対する基本的なスタンスは次のようなものである。

諸宗の真髓を礼拝し帰一の大願に参ぜん（それぞれの宗教の根本のところに帰れば皆一つになる。）

別に一宗を立てず、単に一字に偏らず¹⁶

その上で、「光」のもと、対立する宗教を調和、融合させようとする傾向にあった。大正一〇年に発行された西田の『懺悔の生活』には、西田がそれまでに行った出来事が語られている。その中には、対立しがちな宗教同士を「光」のもと融合させたと言う話が数多く載せられている。ここにいくつか挙げてみよう。

西洋と日本、キリスト教と佛教との相違こそあれ、（光は一つものです。一燈園では（光を受けた実生活を、凡ての宗旨がそのまゝで仲よくして居る事が出来¹⁷ます。）

『出家とその弟子』混淆する宗教世界（大島）

宜しい、判った、有難い、法華もこゝまで手をのばせ、真宗も此處まで還るがいゝ、腹の底から讃美するわたくしの声に南無阿弥陀仏と南無妙法蓮華經との区別はない、結果はこの通り一つではないか、といふのがわたくしの解決であつた。¹⁸

魂を（光にわたし、大慈悲の懷に入り、無心になつて人の要求に奉仕するとき。たとへそれが草取りでも、病める人の背をなでるのも、それはたしかに自他一体の大日を描くのである。¹⁹

以上のように一燈園の特徴は、対立するものを奉仕や実生活を通じて調和させることであつた。その為個人のみならず各宗教をも超えた存在として「光」が想定されていると考えられるのである。

『出家とその弟子』においては、『精神界』との比較から仏教をキリスト教的言説で説明する（「祈り」「愛」）混淆が見られたことを述べた。さらに倉田百三が『出家とその弟子』の創作直前に一燈園で生活していたことから考えるならば、一燈園における「光」のもとに諸宗が混淆することが至上であるという信仰の形態も『出家とその弟子』においてキリスト教の言説が使用される大きな要因となっているのではないだろうか。

つまり『出家とその弟子』の宗教性は、『精神界』のキリスト教の言説で仏教を語る方法を受け継ぎ、さらに一燈園の「光」のもとに諸宗の混淆という性質を反映したものであるという事が出来る。

最後に考えたいのは、親鸞と善鸞の関係である。

放蕩し、父と絶縁状態にあつた善鸞は親鸞の臨終に間に合い、他力本願に関する問いを投げかけられる。以下にその部分を挙げてみよう。

『出家とその弟子』混淆する宗教世界（大島）

善鸞 もつたない。わたしは多くの罪をかさねました。

親鸞 その罪は億劫の昔阿弥陀様が先に償うて下された……赦されているのぢや、赦されているのぢや。（声細くなりときれる。

侍医眉をひそめる）わしはもう此の世を去る……（細けれどしつかりと）お前は仏様を信じるか。

善鸞 ………（善鸞は結局決められない―論者注）（後略）

親鸞 それでよいのぢや。みな助かつてゐるのぢや……善い、調和

した世界ぢや。（此の世ならぬ美しさ顔に輝きわたる）おゝ

平和！ もつとも遠い、もつとも内の。なむあみだぶつ。

（第六幕第四場）

善鸞には、自らの存在を罪として認めてむしろ自らの罪を糾弾し、絶対的な他力、阿弥陀仏にすがろうとする浄土真宗の発想は見られない。むしろ、偉大な父親によって、赦され、不調和な生が現世においての調和を得ることが出来ている。そこにあるのは、自己否定と他力本願の浄土真宗の教えではなく、父による子の許しとそれによって訪れる調和である。これは一燈園における対立するものの調和という構図に非常に近いと言える。この点で、『出家とその弟子』とは親鸞を描きつつも、その他力本願を作品終結部で隠蔽し、調和へと持っていく。ここに、一燈園の「光」による調和との共通点を見ることが出来るのではないだろうか。

六 おわりに

『出家とその弟子』は、浄土真宗の世界を題材としながらも、キリスト教的言説が数多くみられる作品である。仏教を説明するのにキリスト教の言説を使用することは明治末期の『精神界』に見られるものであり、『出家とその弟子』は『精神界』の言説の延長線上にあるということが出来る。また、一燈園にも「光」のもとに様々な宗教が共存するという発想があり、これもまた『出家とその弟子』においてキリスト教言説が多用される宗教混淆の背景であると考えられる。

しかし以上のように考えてきてもまだ一つの疑問が残った。それは、『出家とその弟子』には、不調和から調和へというキリスト教・浄土真宗の両者に直接回収されない平和で調和した世界観が流れていることである。

この点に関しては、一燈園の対立するものを何にせよ実生活を通じて「光」のもとに共存させるという発想の影響が見られるのではないか、ということ考察した。

以上からするならば、『出家とその弟子』は、『精神界』を土台として、さらにこれに一燈園の「光」のもと調和という信仰が描かれており、そこには新しい浄土真宗の運動や新宗教といった近代仏教の大きな変化が、混淆する宗教世界として表現されていることが見てきたのである。仏教界においては、明治末期の『精神界』に既に仏教を統一すべしとの主張が掲載されている。宗教を融合させ、大宗教をつくらうとする発想は、法華文学の創作に努めた宮沢賢治にも見られる。近代日本の仏教が目指した理想の大宗教・世界とはいかなるものであったのか、農業実践等の実際の活動とも絡めた形での考察が今後必要である。

また、西田天香『懺悔の生活』・倉田百三『出家とその弟子』はともに「大正生命主義」として括られる作品である。この観点からの考察も今後の課題としていきたい。

注

- (1) 亀井勝一郎文庫版「解説」『出家とその弟子』新潮社 一九八一年八月 五八刷 二二〇頁
- (2) 紅野敏郎「生田長江 阿部次郎 倉田百三 入門」『日本現代文学全集 46』講談社 一九六七年九月 四二四頁
- (3) 田中実「『出家とその弟子』と念仏思想―△和▽の精神と△他力▽信仰―」『国文学 解釈と鑑賞』第五五巻一二号 至文堂 一九九〇年二月 五四頁
- (4) 清沢満之「実力あるものゝ態度」(暁烏敏編『精神界』精神界発行所 第一巻第七号 一九〇一年七月 二三〜二四頁)
- (5) 「たとひ我れ仏を得たらんに、十方の衆生、至心に信樂して我が国に生ぜんと欲し、乃至十念せんに、もし生ぜずんば正覺を取らじ。ただ五逆と誹謗正法とを除く」(無量寿經 阿弥陀仏が法蔵菩薩として修行していた際の願 正覺 悟り)
- (6) 暁烏敏「『歎異抄』を読む」(暁烏敏編『精神界』精神界発行所 第三巻第七号 一九〇三年七月 三三頁)
- (7) 一燈園は、宗教法人であることを否定し、財団法人の形を取る。ただし、朝夕の儀式においては、般若心教をはじめとし多くの仏典が使用されている。また西田天香というカリスマを中心とした閉鎖的共同体を営んでおり、新宗教に近い形態として扱う。参考文献 井上順考『新宗教の解説』筑摩書房 一九九六年五月 二六八頁
- (8) 西田市太郎『懺悔の生活』春秋社 一九二二年七月 五頁
- (9) 倉田百三『新装・倉田百三選集 1』春秋社 一九七六年一〇月 二五九頁
- (10) 注九同書 二五六頁
- (11) 鈴木範久『倉田百三―近代日本人と宗教』大明堂 一九八〇年二月 二三三頁
- (12) 注一一同書 二二七頁

『出家とその弟子』混淆する宗教世界(大島)

- (13) 注一一同書 二四一頁
- (14) 中西清三『倉田百三の生涯』春秋社 一九七七年二月 八二頁
- (15) 注一一同書 二三四頁
- (16) 注八同書 一〇二頁
- (17) 注八同書 四六頁
- (18) 注八同書 二七八頁
- (19) 注八同書 八五頁